

会長この一年

東北大学大学院理学研究科 佐藤 繁

世紀末の長いようで短かった2年間の会長の任期が終わった。振り返ってみると、この10年間に受け継がれてきた学会の3つのポリシー、充実した会誌の発行、年会・合同シンポジウムの強化と国際交流の推進、会員数の増加と財政基盤の確立を基本方針として、学会の地力、基礎体力の向上を目指したこの2年間であった。詳しくは、各幹事の報告を見ていただくことにして、以下、印象に残っている経過を簡単に述べる。

まず会誌は、編集委員会の努力により、毎号バラエティに富んだ充実した内容に仕上がってきた。しかし立派な会誌を作ることに、出版経費とは正比例しがちである。本会の出版経費は、全収入の40パーセント近くを占めているので、健全財政を目指すためには、これ以上の出費は避けなければならない。編集委員会・編集幹事は、カラー印刷や別刷り代を執筆者の個人負担に変更したり、記事のレイアウトなどを工夫して経費節減に勤め、会誌の質を落とすことなく、会長と会計幹事の厳しい要請によく対応してくれた。感謝申し上げる。財政基盤については、会計幹事が4年に渡って継続的に改善を試み、漸やく展望が拓けてきた状況である。引き続き努力をしていく必要があり、ご協力をお願いしたい。

会員数を1500名にすることは、本学会の長年にわたる目標であり、悲願でもある。年会・合同シンポジウムが年々充実してきているのに、会員が一向に増えないのは、本会の運営における大きな謎でもあった。そこで今期は、状況を改善する一つの試みとして、渉外幹事を中心に共催団体の代表と2回にわたって協議をし年会・合同シンポジウムにおける登壇資格と確認方法を見直した。共催団体のご理解をいただき得られた合意は、(1)主催団体の日本放射光学会会員、または(2)共催団体の会員か職員、に限って発表でき、という内容を発表者資格の欄に明示するものである。この見直しがどのような結果として現れるかは、皆目検討がつかなかったが、12月データでは、正会員数1149名と9月時点に比べて77名増加し、一安心した。なお会員数が1100名を越えたのは、本会発足以来初めてのことである。これからのより一層の会員増により財政事情が改善されることを期待したい。

次に学会の地位向上についてであるが、今期には大幅に改善されたと思われる。きっかけは平成11年6月に日本学術会議で開催された物理学研究連絡委員会学協会懇談会に本会も出席できたことだった。この会合では科学研究費

審査委員の選出方法などが議論をされた。また学術会議の現状等が報告されたが、本会が学術会議会員の選挙に参加できる学術団体として登録されていることも確認した。平成12年1月の評議員会で、前会長の上坪宏道先生を本会からの候補者として推薦することを認めていただき、必要な手続きを行った。続く5月の推薦人会議で、上坪先生は、学術会議会員(補欠)に選出された。正会員でなかったのは少し残念であるが、今後の本会の一つの方向性を見いだしたのではないかと思っている。実際、5月以降、科学研究費審査員、結晶研連委員(以前からかもしれないが)、大学評価委員会委員及び評価員等の各種委員の推薦依頼が続いてやってきた。委員になられた先生方のこれからのご活躍を期待するものである。

学術活動については、若手奨励賞として、1999年2名、2000年2名の授賞者を決めた。研究内容の評価規準について様々なご意見もあったが、将来の我々の分野を、支え発展させる若者の研究の励みになる賞として、これを定着させていきたいものである。これからも沢山応募していただくことを願っている。国際交流への貢献としては、第11回 XAFS 国際会議(赤穂)、第4回放射光アジアフォーラム(広島)を共同主催している。次に、21世紀初頭に広島大学で開催される第14回年会・合同シンポジウムについてコメントしたい。昨年、関係施設のご了解を得た上で、開催場所についての4つの放射光施設のサーキュレーションの間に、広島大学が入る形式での開催をお願いしてきた。幸い広島大学のご快諾をいただき、早速、行事幹事を中心に組織委員会、プログラム委員会を結成し、それぞれの委員会のもとで鋭意準備を進めてきた。最近の報告によると、全体で356件の研究発表申込件数があり、加えて新しく学生ポスター賞、口頭発表者賞が設定されたこともあり、盛況が予想されるということである。本会の可能性と幅を広げてくれた広島大学の皆様に深く感謝したい。

上記のような多岐にわたる活動に加えて、実務的に全体の流れを把握し、時に応じて状況に適切に対処すると共に、幹事会や評議員会の議案を手際良く取りまとめ、その都度資料等を準備するなど裏方的仕事を続けていかなければ、学会が成り立たないのは勿論である。また、多忙な先生方にも、万障繰り合わせて定足数以上評議員会に出席して頂き、会を成立させていただかなければ、原則的には会務を進めることはできない。庶務を中心とした幹事の皆様、学会事務局、評議員の方々、加えて会員の皆様には、

円滑な学会運営のために、多大なご協力をいただき、お陰様で、何とか会長としての2年間を、勤めさせていただくことができた。深く感謝する次第である。しかし将来計画や学会・合同シンポジウムの在り方等いくつかの案件について、検討を進めることができなかつたのは遺憾であ

る。それにもかかわらず、21世紀におけるわが日本放射光学会の更なる発展を確信して、会長の任期を全うできるのは、望外の喜びである。

2年間本当に有難うございました。

2000年度幹事報告

庶務幹事のこの一年

東北大学科学計測研究所 高桑 雄二

庶務幹事となって二年目となる本年は、仕事の内容が理解でき、自分の役割を自覚して活動することができました。この二年間にわたって庶務幹事の仕事をしていただき感じたことは、日本放射光学会のことがようやく理解できたことです。これまで10年近く会員であり、学会誌の編集委員や行事委員会の委員を勤めながら、日本放射光学会についてあまり意識せずに、さらには距離をおいて考えていたことに気づかされました。台風の周囲では暴風雨が吹き荒れているにもかかわらず、目の中に入ると台風の存在を感じさせないものなそうですが、それとは逆に、この度学会活動の中心である幹事会に参加して初めて、日本放射光学会のこれまでの経緯や現在の状況、放射光施設と学会の関わり、高輝度光源の建設などについて改めて深く考えさせられました。放射光をキーワードとして広範囲かつ多様な分野の方々が集まって学会活動を展開していくことの重要性と必要性を認識させられるとともに、多くの課題があることも分かりました。庶務幹事として日本放射光学会を、如何にして魅力ある学会として認識してもらい、多くの方々に自発的に学会活動に参加してもらわなければならないことは、かなり商売と似ているとも感じました。店先を通り過ぎていく人を見つめる、開店早々でこれから馴染みの客を増やしたいラーメン店の店員の気持ちが良く分かりました。しかし、ラーメン店と同様に、ただ待つだけでなく声をかける必要もあるかと思い、評議員の方々に学会の入会申込書を配付し、勧誘をお願いいたしました。

この一年間を振り返ってみますと、これまで幹事会や評議員会を開催していた六本木の物性研の会議室がこの春から使用できなくなり、会議室の確保のために事務局には大変お世話になるとともに、御協力いただいた先生方に感謝申し上げます。佐藤会長の学会運営方針の一つである、学会財政の健全化と会員数の増加の実現ために、この一年間多くの試み続け、別刷りやカラー印刷の有料化、予算執行にあたっての見積もり合わせ、合同シンポの登壇者資格の明確化、合同シンポ参加費の見直し等に取り組んできました。各幹事の御努力のおかげで、例えば、会員数が2000年11月28日現在で1149名(内学生116名)へと大幅に増加することができました。この他にも本年に入り、科研費や学術会議等からの多くの推薦依頼、さらには、日本放射光学会が主催となったXAFS国際会議等があり、忙しい一年となりました。どの一つをとっても重要な課題であるため、幹事会をはじめとして多くの場で十分な議論が尽くされるように努力してまいりました。そのために、会議時間の延長や配分の不備があったかとは思いますが、その後の経過をみますと、意思疎通を図り、共通の認識をえるためには十分な議論は必要との思いを再確認いたしました。

最後に庶務幹事の二年間の任期を終わるに当たり、佐藤会長、各幹事の方々、そして事務局をはじめとして、御指導・御協力いただいた多くの方々に誌面を借りて感謝申し上げます。